

飯舘村スタディーツアー

国際交流学科 3 年 S T

1. はじめに

今回のスタディーツアーで初めて福島県に行き、飯舘村に到着した時 2011 年の原発の事故がなければ自分には行かなかったのかなと最初に感じた。福島県は、緑や山が多く自然に囲まれた素敵な所。しかし、飯舘村に着くと一変しフレコンバッグの山で村の農地が埋め尽くされていた。自動車は除染作業員の方が乗ったバスとしかすれ違う事がなく、隣町の長閑な雰囲気と違い、異様な雰囲気だった。

私はスタディーツアーに参加するまで、飯舘村の事は現地で暮らす方の声や映像などを通してでしか当時の様子を見た事しかなかった。ツアーに参加することになり、飯舘村に着くまでは写真で見た大量のフレコンバッグと空き地となった牛舎、そして飯舘村で復興活動に積極的に取り組む方々がいるという想像をしていた。実際は想像通りだったのは確かでしたが、行った人にしか分からない衝撃がありました。その時は車で通り過ぎて行く景色を呆然と眺めるだけで何も言葉が出ませんでした。ツアーでの 2 日間で、飯舘村に対する印象と今後の取り組み方の変化について振り返る。

2. 福島

福島駅に到着し、駅の外に出ると大きな駅にも関わらず人気を感じないのが第一印象でした。交通手段は自動車で、渋谷の様に人が歩くという事がなくて驚いた。風景は、建物が並んでいった通りは駅前周辺で、車で 10 分程進むと山々に覆われて緑豊かな街の風景が開けて素敵でした。田んぼが多く、お店が何十メートルか先に点々とあり川の音と風の音が聞こえる程自然が広がっていた。行き先が偶然だったかもしれないですが、駅前を離れると私達と年の近い若者が少なく、高齢者の方が多い印象でした。人はとても温かく、優しい方ばかりで、もう少し若者が戻ってくれば復興にもより活気が戻ってくるのではないかと感じた。

3. 菅野さんの旧自宅で

飯舘村に入るとフレコンバッグが仮かり置き場と呼ばれる農地に、大きな塊が沢山至る所にあった。フレコンバッグがある事は知っていたが、実際に見るとどの景色を見る度に自宅に到着し、最初に驚いたことは一軒家に 10 人以上で入った事がなかったので、とても広く立派な昔ながらのお家がとても居心地が良かったです。事故が起きていなければ、非難する事はなく、自然文化遺産として取り上げられ自然豊かな飯舘村に観光客で盛り、賑わった風景があったかもしれない。菅野さんの家についてお昼を食べていた時は呆然となかった話などを考えてしまったりしました。しかしツアーに参加していた、東大の方々、NPO をバックアップして下さっている方々、皆さん一人一人の目が真っすぐで賑やかな雰囲気の中にもピリッとした空気感がありました。ここにいる参加者の方々は全員本気だと感じ無知の自分が此処の場に居て良いのか焦ってしまう程でした。

菅野さんのお話から溝口先生のお話と、福島原発事故から放射能の影響について詳しくお話しして頂きました。菅野さんのお話は、どれも自分に関わりのある問題だと感じました。現状を客観的に見ていて私自身も飯舘村に対する復興の考え方が少し距離を置いてみていた事が、関係のある自分自身の問題でもあると問題認識が変化しました。

溝口先生のお話は、以前私が「放射能とは何か、そして何処がどの様に問題なのか」という質問をした時丁寧に答えて下さった所が、パワーポの 1 ページとしてパワーアップしていて「内部被ばく」について改めて理解する事が出来ました。

4. 飯舘村周辺

飯舘村の周辺は、除染作業が行われていて作業員の方たちは小型のバス何台か出して活動をしていた。除染作業服を着用し、厳重にマスクを装着して作業をしている所をみて、何もしていない私達と何が違うのかが分からなかった。木々を生い茂り緑の豊かな山々ははげ山となり、山の表面は乾いていました。田んぼだった所も砂漠化し農地として使われてきた場所はいつ手

入れられる様になるのかと感じました。至る所で放射能の検査装置があり、フレコンバッグが至る所にあり、全て取り除けば自然豊かな村が蘇るのかなと思いつつも、今の状態から少しでも新しい村に生まれ変わる為に菅野さん以外の人たちはどんな活動しているのか気になりました。観光客や若者に来てもらう為に花園を作ったり、検査を続けたり、試験栽培を積み重ねたりと地道に活動が続いている。しかし、土曜日の飯舘村は私達以外に他に人が居なくて今の風評被害や飯舘村の現状をどう全国に届けるのかと考えると SNS での発信が重要になると改めて感じました。

5. まとめ

飯舘村はとても明るく、活気に溢れた人が集まっている村でした。再生復興をしたい、今までの生活に戻りたい、飯舘村を守りたいなど一人一人が村に強い思いがあるという事を改めて実感した。真剣に問題に取り組む方たちの中で私は、どんな立場であるべきなのか考えさせられました。実際に現地の事についてまだ知らない事が多く、聞く事全てが大切に新しい事ばかりでした。フレコンバッグの量、緑豊かなはずの山が乾燥している状態、砂漠化した農地、仮かり置き場として使われている農地。農民が生活していた場所は汚染物質で場所が獲られていて、元の農業の生活に戻ることが困難な事を痛感しました。もっと国が、飯舘村に住んでいた住民も、そして間接的に被害に遭っている私達にもっと問題意識を高める為には正確な情報の発信が必要不可欠であると確信しました。ニュースで飯舘村の再開について来年の3月とありましたが、ほんの数分の中に村民の意見が少ないと感じました。取り上げられた言葉も誰もが思っている訴えだけでした。もっと現状と活動内容、そして、詳しい内容もテレビで取り上げられてもいいのではないかと感じました。私達が伝えたいのはいかに飯舘村が大変な状況であったかではなく、これからどんな方向で再開するか、どんな活動しているのかを発信する事です。また第3者から問題意識についてどう捉えているか、福島で起きた事故と捉えるのではなく、原発によって引き起こした環境問題について国民が考えられるように推進していく必要があるのではないかと感じました。

私は、これからゼミで来年の『小松菜餃子』の発売を目指し、消費者にどう食で飯舘村のことを環境問題として考えてもらうかを考えながら、私たちが食を通じて全国の人と共生をしているという事を一人でも多く認識してもらえるように、活動に取り組みたいと思いました。

行く前に感じていた、「大変だな」「私も考えなければ」という考えから、帰ってきてから私はこれから生きていく為に食というものを通じて、他の県と関わっているという考えに変化しました。環境問題は必ず一人一人に問題があり、認識して解決する方向性を作っていかなければならない事だということ強く感じました。